

リュド・ロシエ著

プ ラ ー ナ

原 實

現在、北米（現役）最高のサンスクリット学者と仰がれる Ludo Rocher は J.Gonda の主宰する *A History of Indian Literature* の企画に参加し、その中の *Purāṇa* を担当し、近時その成果が刊行された。この分野は前世紀の G.Bühler の *Grundriss der indo-arischen Philologie und Altertumskunde* の企画に含まれなかったから、今回の本書の出版は久しく待望されていたものというべく、本書が今後この分野に於ける必須の標準的参考書となるであろうことに筆者は疑いを挿まない。

本書の本文（254頁）は略々同量の第一部（*Purāṇic Literature pp.1-131*）と第二部（*Individual Purāṇas pp.133-254*）より成り、巻末は略語表、文献目録、索引（pp.255-282）によってしめくくられている。第一部は更に第一章（*Purāṇa studies*）と第二章（*The place of the purāṇas in Indian literature*）とに分かれ、各章は更に細分化される。

先ず序論（1.1）に於いて W.Jones, A.Hamilton, Vans Kennedy, H.H. Wilson, E.Burnouf より、W.Jahn, W.Kirfel, R.C.Hazra を経て、All India Kashi-raj Trust の活動（即ち *Vāmana*, *Kūrma*, *Varāha-purāṇa* の *Critical Edition* の出版と雑誌 *Purāṇa* の刊行）に到る *Purāṇa* 研究史が概観される（1.1）。次いで第二章には「*Purāṇa* 文献の重要性」の題名のもとに、その第五の *Veda* としての性格、即ち婦女子や *Śūdra* に解放されているこの種の文献の通俗性ならびに低俗性、又その故にそれらが往時の多数の民間伝承を盛って民間信仰の実態を伝え、*Hinduism* の百科全書とされる所以が述べられる（1.2）。結果的にこの種の文献は *Vaiṣṇavism*, *Śaivism* 等の宗派色を濃くするが、宗派間の借用、改修が自在であるために、特定の文献の特定宗派性を以って立論することの危険を著者は警告している（1.3.1）。次いで *Amarakoṣa* にみえる *pañca-lak-ṣaṇa*（1.3.2）、所謂18 *purāṇa* の問題（1.3.3）、*purāṇa* 文献自体が *pur-*

āṇa をどのように記述しているか (1.3.4.)、その所謂 Smṛti-chapter の成立と、それにまつわる諸問題 (1.3.5) 等が論じられる。第四章は現在 purāṇa 文献の基礎に想定される Ur-purāṇa の問題が F.E.Pargiter, W. Kirfel に代表される文献学的研究との連関に於いて解説され (1.4.1)、更に Atharva-veda 11.7.24 に言及される単数の purāṇa の問題が論じられる。

第二章は先ず五つの視点より purāṇa 文献の性格を論ずる。先ず第一に purāṇa の伝承形態がどのようなものであったか、それらが如何に融通無礙に伝えられているかの問題が F.Wilford, H.H.Wilson, G.Bühler, R.de Vreese (Nilamata) の個人的経験に徴して解説される。彼ら purāṇa の伝承者たちはこれら泰西の研究者の眼の前で勝手に purāṇa の本文を改変し、増広して憚るところがなかったといわれる (2.1.1)。伝承の担い手であった Sūta、及びその後裔である Bhāṭ も所詮はこの種の伝承者と選ぶところなく (2.1.2)、その結果特定の purāṇa に異った伝本を生み (2.1.3)、それが多岐に分かれたとしても敢てこれを奇とするに足りない (2.1.4)。Rocher は purāṇa 文献を text の形に於いてのみ研究者が理解し、text のみを研究の対象として立論することに問題があるとする。筆者もまた彼の説に賛同するが、然らば purāṇa は如何にして研究されねばならないのか。ここにこの種の文献の研究の限界と難しさがある。何れにしても現在世間に通用している purāṇa の text はその何れもが決定的なものではなく、又所詮なり得ぬことは、この伝承形態の実態に徴して明らかである。この間に著者は mahā-purāṇa, upapurāṇa, sthala-purāṇa (= māhātmya), caste-purāṇa (malla-purāṇa, etc.) を概観し、更に Marāṭhī, Kannada 等俗語で伝えられた purāṇa に言及する。その中には Jesuit 宣教師の手に成るもの (1649)、又 Basava の伝記を伝える purāṇa 等が含まれている。最終節 (2.1.5) にはこれと Itihāsa-purāṇa として並び称せられる二大叙事詩との関係、所謂 Smṛti-chapter との連関に於いて法典一般との関係、Kālidāsa, Bāṇa 等の純文学との関係、仏典 (Jātaka, Avadāna) 更に -purāṇa, -carita の名を有する Jaina 文献と purāṇa との関係が略述されている。

第二章、第二節は四つの視点により残余の問題を取扱う。個々の特定 purāṇa の写本を校合するよりも、特定主題 (神話、伝説) を中心に諸 purāṇa の関連箇所を比較検討することの方がより生産的であることは W.Kirfel (pañca-lakṣaṇa, Weltgebäude), F.E.Pargiter (Kali Age), P. Hacker (Prahādā) 等の研究によって立証せられる。この事は反面、個々の purāṇa の Critical Edition を出版することにどれ程の意味がある

かの問題に連関する。その意味では曾って V.Raghavan の言った “the edition of one Purāṇa means virtually the edition of all of them” (p. 98) の言葉は尚現今も生きているように思われる (2.2.1) (cf. also H.Bakker, ZDMG Supplement VII, 1989, pp. 328-341) が、又この問題は当然この種の文献の年代決定の難かしさに通じている (2.2.2)。最後の二節は「宗教文献」「歴史文献」としての purāṇa の問題を扱い、前者に於いて purāṇa 文献に於ける梵天 (Sarasvatī を含む)、Viṣṇu (Lakṣmī, bhakti, avatāra, Rādhā の問題を含む)、Śiva (Pārvatī, śakti, Skanda, Gaṇeśa, を含む) 崇拝が論じられる (2.2.3) が、後者は問題がより複雑である。何となればそれは purāṇa, 就中 vaṃśānucarita の部分の記述に歴史的事実性を認める (V.A.Smith, F.E.Pargiter, R.M.Smith) か否かの問題に係わってくる故である。その甲論乙駁の研究史が要領よく解説され、この間に劫期 (kalpa, yuga) の問題、purāṇa と Kṣatriya 階級との関係、その原語 (Prākṛit) 想定問題が論じられ、更にその歴史記述と類を同じくする purāṇa の地理記述、宇宙記述の問題が言及される。

本書の第二部は個々の purāṇa を解説する。そこには Ādi-purāṇa より Yuga-purāṇa に至る約80の purāṇa が Alphabet 順に枚挙され、その各々に原典の出版、翻訳・研究が網羅されている。もとよりその重要度に従って頁数の長短はさまざまであるが、その内部に重要な物語や儀軌 (例えば Hariścandra, Vipaścit, Devīmāhātmya in Mārkaṇḍeya-purāṇa, Pretakalpa in Garuḍa-purāṇa 等) を含む場合には、それぞれについて詳細な研究史が掲げられている。その意味でこの部分は個々の purāṇa 研究のための貴重な書誌学的情報源となっている。

これを要するに本書は、その第一部に於いて purāṇa に関する重要な諸問題を系統的に論じ、第二部に個々の purāṇa の研究史を網羅して、この分野の研究にあるべき標準的参考書の範を垂れた。その意味で今後久しく本書がこの分野の研究者に座右の書となり、Ludo Rocher の名は法典研究に於いてのみならず、purāṇa 研究の分野に於いても不朽のものとなるであろう。

Ludo Rocher: *The Purāṇas* (A History of Indian Literature, edited by Jan Gonda, volume II Fasc. 3) (1986 Otto Harrassowitz, Wiesbaden) I-VII + pp. 1-282.